

小児成人型糖尿病に関する文献的研究

(分担研究：コーホート調査実施の基礎的検討)

神谷 齊

増田 英成 (研究協力者)

要約：本邦に於ける小児インスリン非依存型糖尿病(NIDDM)の実態は未だ不明確であり、詳細な疫学調査報告は少ない。肥満との関連では、小児NIDDMの約80%に肥満を認め、成人と比較してより密接な関連を認めた。合併症の出現頻度はインスリン依存型糖尿病(IDDM)と大差は無いと考えられており、注意が必要である。今後、全国規模で小児インスリン非依存型糖尿病の有病率、発症率を求める事が必要であり、対策が望まれる。

見出し語：小児糖尿病、インスリン非依存性糖尿病(NIDDM)、疫学、肥満

小児インスリン非依存型糖尿病はインスリン依存型糖尿病と異なり、発症初期はインスリンを必要とすることは少なく、運動、食事療法で寛解し、比較的予後は良好と考えられていたが、長期予後を見てみると必ずしも良好とは言えず、網膜症などの細小血管障害も少なくないことが明らかにされてきている。

本邦に於ける小児インスリン非依存型糖尿病(NIDDM)の疫学調査は報告は少なく、その実態は未だ不明確である。北川らは¹⁾、²⁾昭和49年より東京都に於て学校検尿による尿糖のスクリーニングを開始し、11年間でのべ約300万検体より112例のNIDDM患者を発見した。以上のデータから発症率を年間小児10万人当り2-5人と推定した。

また、肥満とインスリン非依存型糖尿病との関連を見てみると、北川らの報告では、糖

尿病児(NIDDM)の78.7%に肥満を認めており、本邦に於ける成人領域の報告の約30%とは異なった様相を呈している。合併症についても小児インスリン非依存性糖尿病についての報告は少ないが、山本らは³⁾ 68例の小児 NIDDM患者を追跡調査した結果、比較的早期に網膜症の出現を認めており、IDDMでの網膜症発症の報告とはほぼ一致することを報告している。

肥満とインスリン分泌能の関連を見てみると、吉住ら⁴⁾が報告した重症小児肥満児132名の経口糖負荷試験(1.75g/kg標準体重)の結果より7.6%が糖尿病パターン、14.4%が境界型を、また、高インスリン血症は48.5%に認めた。これは正木らの報告と一致する。

小児インスリン非依存性糖尿病のスクリーニングは現在のところ学校検尿で行なわれ、2次スクリーニング法として糖負荷試験が行われて

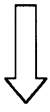
いるがHb1c,HbA1c,Fructosamineなどを用いた簡易判別法も今後試みられるべき方法と思われる。また、小児慢性特定疾患台帳よりの抽出も行われているが、重複や漏れがあり、またプライバシー保護との関連から、今後整備されるべき方向と考えられる。

まとめ；小児インスリン非依存型糖尿病の本邦での疫学調査報告は少なく、その実態は不明確である。

成人でのNIDDMスクリーニング法であるOGTTは、小児領域では協力の得られにくい方法であろう。Pilot studyとして比較的人口移動の少ないモデル地区を設定し、正確な小児インスリン非依存性糖尿病の発症率、有病率を求める必要があると考えられる。小児NIDDM発症母胎である小児肥満に対して、積極的な治療介入を行い、肥満群からの発症と比較検討を行なうことが必要と考えられる。

文献

- 1) 北川照男、大和田操、他:小児NIDDMの現況と背景.Diabetes fronteer.vol 1.777-782,1990
- 2) 大和田操、北川照男、他:小児期発症のインスリン非依存型糖尿病の診断と管理.小児科MOOK NO47,小児成人病.東京、金原出版、62-74、1987
- 3) 山本隆憲:小児糖尿病の眼底所見ならびに蛍光眼底造影所見について.日眼誌、83:128,1979
- 4) 吉住完、増田英成、他:重症肥満児の施設入院療法.思春期学.vol.6:349-355,1988



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:本邦に於ける小児インスリン非依存型糖尿病(NIDDM)の実態は未だ不明確であり、詳細な疫学調査報告は少ない。肥満との関連では、小児 NIDDM の約 80%に肥満を認め、成人と比較してより密接な関連を認めた。合併症の出現頻度はインスリン依存型糖尿病(IDDM)と大差は無いと考えられており、注意が必要である。今後、全国規模で小児インスリン非依存成糖尿病の有病率、発症率を求める事が必要であり、対策が望まれる。